

Title	ロックの道德哲学と教育思想 (穂積文雄教授記念號)
Author(s)	平井, 俊彦
Citation	經濟論叢 (1966), 97(1): 127-144
Issue Date	1966-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/133098">http://dx.doi.org/10.14989/133098</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第九十七卷 第一號

## 穂積文雄教授記念號

---

献 辞 .....	岸 本 英 太 郎	
日露戦争・第1次大戦間の日本経済 .....	堀 江 保 藏	1
社会思想一論 .....	出 口 勇 藏	22
トマス・モア『ユートピア』分析の視角 .....	伊 達 功	39
島の農業について一覚書 .....	野 木 稔 郎	57
歴史における為政者の役割について .....	伊 藤 幸 一	75
王安石新法の貨幣的側面 .....	桑 田 幸 三	92
イギリス労働組合運動における1889年 .....	前 川 嘉 一	110
ロックの道德哲学と教育思想 .....	平 井 俊 彦	127

穂積文雄 教授 略歴・著作目録

---

昭和四十一年一月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## ロックの道徳哲学と教育思想

平井 俊彦

### I ロックの道徳哲学の意義<sup>1)</sup>

人間の自然を探究し、これを開発すること、このことは啓蒙思想すべてに共通した問題であった<sup>2)</sup>。ロックもまた、というよりことにロックが生涯にわたって追求した課題も、この点にあったのである。ところで、これまでのロック研究史のしめすところによれば、主著『人間悟性論』について、人間悟性がどのようにして伝統的な生得観念を打ち破って、感覚的経験に基づいて真理を認識するか、といういわゆる経験論的認識の側面からロックの個性に迫ろうとするか、あるいは政治思想史のうえで労働による近代的な私有財産権思想の確立に焦点があてられてきた。たしかに、前者についていえば、ロックが経験論的地平で近代人の知性の営みを確立したために、のちのバークレーやヒュームの先駆者となりえたし、さらにはカントの認識論に大きい影響をあたえた歴史的意味は、けっして没することはできない<sup>3)</sup>。だが、そのばあいにも、ロックはこのような認識する知性の在り方とともに、行為する人間の在り方をも追求しているのであって、この人間の実践的な側面をあきらかにしなければ、ロックの思想全体はとらえられないであろう。これまでのロック思想の研究史は、比

1) この小論は、昭和39年6月に早稲田大学で開かれた経済学史学会の関東部会における報告を中心として、この報告をロックの『教育にかんする省察』にまで具体化したものである。その狙いは小著『ロックにおける人間と社会』（昭和39年2月、ミネルヴァ書房）で、わたしが論じ残していた『教育にかんする省察』をロックの思想体系のなかで位置づけることであり、さらにより重要なことだが、このことをとおして以前に提起したロック像を啓蒙思想史の流れのなかでもっと相対化し、ロックの理性的純化のもつ限界をあきらかにすることである。これによって、同時に山口和男氏が小著に対して提出された、「ロックの思想の変革性の限界」や「啓蒙思想の類型」についての疑問（山口、『甲南経済学論集』第4巻第5・6合併号）について、お答えしたい。

2) I. Kant, *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?*, 1794, 篠田訳『啓蒙とは何か』7ページ以下を参照。

3) C. R. Morris, *Locke Berkeley Hume*, 1952にみられるように、主として経験的認識論とし

較的この道徳哲学 *moral philosophy* の問題に立ち入ることが少なかった。わたしは本稿のなかで、『人間悟性論』を手がかりにロックの道徳哲学の課題をとらえ、これが『教育にかんする省察』 *Some Thoughts concerning Education* のなかでいかに具体化されるかをあきらかにしたい。

わたしはすでに、小著『ロックにおける人間と社会』のなかで、経験的に認識する悟性の営みをその存在論的な方向でとらえてきたし、また観念の形成される過程で、ロックが人間の行為や意志および由自の問題をどのようにとりあげたかを追求してみた。そして『人間悟性論』でつかまれた人間像がどの点で『統治論』と結びつくのかを、探ったのである<sup>4)</sup>。ロックの人間性の理解には、感覚的要素と理性的要素とがあり、これら二つの要素がいかに結びついているかが、啓蒙思想史のなかでロックの人間像の類型を決定するものであった。これをホッブズのそれと対比してみると、つぎのようにいえるであろう。すなわち、人間はその本性からして快楽を求め苦痛を避けるべく行動する。『リヴァイアサン』の人間が、まさにこれである。「対象の行為が耳目その他の器官から心へ継続されるばあい、そこに生ずるじっさいの効果は、運動すなわち努力にほかならず、それは動いている対象への欲求または嫌悪である。」<sup>5)</sup> 物体の運動が人間の感性の運動となり、対象への欲求が満たされるとき、ここに歓喜が生まれる。「なんにせよ、ある人の欲求・意欲の対象となるものは、すなわちかれがかれ自身として善と呼ぶものである。」<sup>6)</sup> ロックもまたエピクロス以来の快楽説に立ち、人間には快楽と苦痛の観念がかならずあらわれることを承認する。「喜悅および不安はいずれも、感覚および反省の両者によるほとんどすべてのわれわれの観念と結びついている。そして外部からのわれわれの感覚も、内部における心の思考もすべて、われわれのうちに快楽または苦痛を生まないものは、ほとんどない。」<sup>7)</sup> そしてこの快苦の感情こそが、意欲を生み人間を行為へ

てのロックがとりあげられている。

4) 小著『ロックにおける人間と社会』昭和39年、第1章を参照。

5) T. Hobbes, *Leviathan*, p. 33. 水田洋訳『リヴァイアサン』岩波文庫版、100ページ。

6) *Ibid.*, p. 32, 邦訳、98ページ。

駆り立てる原動力であった。「われわれは快楽を追求するために能力を用いようとするのとおなじく、苦痛を避けるためには、いつでもわれわれの能力を用いるのである。」<sup>9)</sup>

快苦の感情が人間の意志を決定するとの考え方は、いわゆる快楽主義または幸福説と呼ばれ、レズリー・スティーブンが『18世紀のイギリス思想』で指摘しているように、イギリスに伝統的な功利主義の体系となってベンサムのなかで大成された<sup>9)</sup>。ところで、このばあい感性的なものが人間の行為を決定づけるという点では、たとえ、その帰結として神や絶対君主の力を導き出さねばならなかったにせよ、ホブズは一貫していた。これに反して、ロックはホブズより多面的であって、人間性のうちに感覚とはべつに、感覚からは演繹できない反省の働きをみとめた。むしろ、ロックは『人間悟性論』のなかで、人間固有の精神の働きは感覚による物体の力の受動力にあるのではなくて、人間が自己自身を反省する能動的な力にあると考える。しかも、この内省によってのみ、人間は自然的必然性の世界から脱却できる、というのである。すなわち、いろいろの感覚的欲望を抑制し、比較・選択する力がこれである。ロックは意志を欲望から区別し、この力こそ意志であるとして、つぎのようにいう。「われわれがただこれこれのある特別の働きをなし、あるいはなさないように定め、またいわば命令するところの心の思考あるいは選択によって、いくつかの心の働きおよび体の運動を始めたり、抑えたり、続けたり、止めたりする力を、われわれのうちに見出すということは、少なくともあきらかであるとおもう。この力は、われわれが意志と呼ぶところのものである。」<sup>10)</sup>つまり、ロックにとって行為を決定づける意志は、けっして自然的衝動力によるものではなくて、いろいろな欲求を比較し思考する悟性を媒介としなければならない。こうした

7) J. Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Vol. 1, p. 160, 加藤卯一郎訳『人間悟性論』上、岩波文庫版、111ページ。

8) *Ibid.*, p. 161, 邦訳、112ページ。

9) L. Stephen, *English Thought in the 18th Century*, Vol. II, p. 80.

10) J. Locke, *ibid.*, p. 313, 邦訳、上、233ページ。

意志を媒介としないかぎり、その行為は非自発的であり<sup>11)</sup>、したがって自由ではない。「自由の観念は、心の決定または思考にしたがって、ある特別の行動をなし、またこれを抑えんとする行為者のうちにある力の観念である。」<sup>12)</sup>

このように、ロックが自然的衝動力を抑え、これを恠性または理性の力で純化しようとしたことは、一方でピューリタン革命の「熱狂の時代」から王政復古の「理性の時代」への歴史的推移に対応するものであった<sup>13)</sup>。『人間悟性論』の巻末で、ロックははっきり理性によってこの熱狂の火を消してしまう。「熱狂は理性を棄てて、理性なしに啓示を立てようとするのである。こうして熱狂は、実は理性と啓示をともにすてて、そのかわりにある人自身の頭のなかの根拠のないいろいろな空想をおきかえて、それを思考ならびに行為の基礎と仮定するのである。」<sup>14)</sup>いうまでもなく、ロックは理性と啓示との一致をその基礎におこうとしたのである。他方で、このことはピューリタニズムやホッブズとちがった人間像の確立でもあった。ことにロックが感性的欲求と理性との葛藤をとおして、理性によってこれを調和しようとしたことは、ブルジョワ的人格が自己の人間性内部の分裂をとおして、個人として確立され充実化される過程でもある。こうした人間性内部の二面性が、またその間の葛藤があきらかに自覚されることなしには、教育論は成立しないはずである。わたしは、ロックの『教育にかんする省察』をこのようなものとしてとらえたい。そうだとすれば、『人間悟性論』のなかで提起されたロックの道徳哲学をよりいっそう具体化したのが『教育にかんする省察』であり、したがって、『統治論』の背景にある人間像とも結びつくはずである。

さらに、このような道徳哲学の立場から問題を提起するならば、むしろロ

11) *Ibid.*, p. 314. 邦訳, 上, 233ページ。 12) *Ibid.*, p. 316. 邦訳, 上, 235ページ。

13) R. I. Aaron, *John Locke*, 1935, p. 1; 中村恒矩「ロックにおける寛容論の発展」『一橋論叢』第59巻第1号, 92ページ。

14) J. Locke, *ibid.*, Vol. 2, p. 430. 邦訳, 下, 222ページ。『人間悟性論』第4巻第19章「熱狂 enthusiasm について」と第20章「不正の同意 wrong assent について」は、いわゆるピューリタン諸派への批判である。第20章で誤謬が欲望や熱情から生ずることをつぎのように説明している。「貪欲な人の推理の天秤の一方の皿にどんな大きい蓋然性をかけても、他方の皿に金銭をかければ、どちらの重さが優るかを予知することはたやすい。世俗的な心の持主たちは、泥の壁のように、もっとも強い砲弾に抵抗する」と。

クは18世紀の道德感情学派に近づくことになるであろう。もとより、ロックの理性は、生まれながらにして完成されたものとして与えられているのではない。だが、理性は神から刻印されたものであり、それが知性よりも徳性を日ざすものであるとされるとき、きわめてシャフツベリやスミスに近いものがあるといえよう。ロックがここで提起した人間像は、ある意味では現代までのイギリス人のコモン・センスとして定着するものである。ところで、ロックの理性による感性の純化は、感性的自然をゆがめることにならないであろうか。小論は、『教育にかんする省察』を、ロックの道德哲学としてとらえることによって、ロックの人間像の意義とその問題性をあきらかにしたい。

## Ⅱ 教育論の課題

### ——欲望と理性との葛藤——

モンマス公事件に加担したホイッグ党の大立者シャフツベリ卿は、1683年1月にアムステルダムで客死した。この陰謀事件が発覚したために、ラッセルやシドニイは処刑され、シャフツベリ家とことに親しかったロックも、その嫌疑をうけたために、同年9月オランダに亡命した。ロックはことに町並みの美しい、自由主義の香りの高いオランダの都市ロッテルダムやアムステルダムを好んだようで、名誉革命の成功するまで、6年たらずこの地に留まった<sup>15)</sup>。その間に、祖国の政情を憂いつつ『人間悟性論』の執筆を続けていた<sup>16)</sup>。がもう一つ、『教育にかんする省察』もまた、この亡命中に執筆されたものである<sup>17)</sup>。クランストンの『ロック伝』によれば、ロックの生地サマセット州に従妹のメアリ・ジェップ Mary Jepp がいたが<sup>18)</sup>、その夫エドワード・クラーク Edward Clarke に依頼されて、ロックは1684年3月ごろから、かれらの子供の教育方

15) M. Clanston, *John Locke, A Biography*, 1957, p. 231. ロックのオランダ観は亡命中の日記で明らかにされている。この地が、イギリスからの情報を入手するに便利だったことも、ロックをひきつけたのであろう。

16) 『人間悟性論』がどのようにして書かれたかは、小著『ロックにおける人間と社会』第2章第1節を参照。

17) M. Clanston, *ibid.*, p. 239.

18) *Ibid.*, p. 214. メアリ・ジェップ Mary Jepp はいうまでもなく、のちの Mary Clarke である。

法についてかなり長いエッセイをしたため、これらを手紙にして何回か書き送っていたようである。ロックは帰国後これらの手紙を集め、加筆・訂正して1冊にまとめ、1693年に初版を出版した<sup>19)</sup>。数あるロックの著作のなかで、イギリス人にもっともよく読まれてきたのは本書であるといわれ、ロックの生存中に何回となく版を重ね、またロックも生涯にわたって教育問題に強い関心をよせて、そのつどこれに増補を加えたのである<sup>20)</sup>。

ロックの『教育にかんする省察』は、もともとクラーク夫妻の要請で、その息子の教育について書かれたものであるが、このザマセット州のチブリー家は大地主であり、いわば本書はこうした郷紳のために書いたものである。「この書簡においてももっとも関心が払われたのは、上流階級の要求についてである。というのは、ひとたびこの階級の人々が教育によって正されるならば、その人はすみやかに他の階級の人々をも秩序あるものとするからである。」<sup>21)</sup> ロックは『統治論』のなかでも、当時のブルジョワ社会の担い手をば私有財産の所有者であり、この階級の人々のみが理性をもちうる人間であるとの考え方をとっているが、上の言葉はこの考え方と共通のものがあるだろう<sup>22)</sup>。したがって、教育される対象もまずこれらの有産者層の子弟であり、教育する主体もまた一定の理性ある両親であり、「育ちのよい」家庭教師である<sup>23)</sup>。ここでは、召使

19) *Ibid.*, p. 239.

20) *Ibid.*, p. 239. 「ロックが教育問題に関心をもちつづけていたことはあきらかである。」また、エアロンは『ロック伝』のなかでも、この点について、次のようにのべている。「ロックの思想は教育と宗教の分野で、広い影響力をおよぼした。ことに教育論は、いまなお新鮮で価値のあるものである。」J. Aaron, *ibid.*, p. 287.

21) J. Locke, *Some Thoughts concerning Education*, 13. ed., 1764, p. A 3. 押村襄訳『教育にかんする考察』玉川大学版、16ページ。以下、本書はすべてこの版と、この邦訳による。ただし訳文は適宜あらためている。

22) C. B. Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism, Hobbes to Locke*, 1962, p. 222. マクファーソンは本書のなかで、ロックの思想が私有財産所有者のものであることを『統治論』についてきわめて強調している。こうして私有財産と理性との結びつきをとき、私有財産をもたない、したがって理性をもたぬ「労働者階級は国家の必要部分ではあるけれどもその成員は事実上、政治体を構成するに充分なものではなく、そうなる資格をもたない。また第二に、労働者階級の成員は充分に合理的な生活をしていないし、できもしない」と。この点ではたしかにロックの一面をついている。この反面については、本書にたいする批評「所有的個人主義の政治論」『経済論叢』第94巻第3号を参照。

23) J. Locke, *ibid.*, p. 116. 邦訳、140ページ。ロックは家庭教師をきわめて重視し、そのために本書のなかに「家庭教師の必要な資格」の章をもうけている。



いは完全に排除されている。「できることなら子供たちは、使用人たちとは、ぜんぜん話をさせない方がよい。なぜなら、礼節ということでも徳性という点でも、これらの悪い慣例がひろまると、子供にもおそろしい勢いでうつるからである。」<sup>24)</sup> こうしたロックの言葉のなかに、われわれはロックの、ひいては17世紀の啓蒙思想の階級的基礎をうかがうことができるし、名誉革命の性格をも知ることができよう。しかも、啓蒙がジェントリ階級から順次、他の階級へおよぼと考えられているのである。だが、思想はこうした特殊な階級を基礎としてその普遍的なものがつねに語られているのである。

ロックは人間をほんらい自然的なものであると考え、この「人間の自然」から出発する。ことに健康は身体の自然である。したがって、これに人為的な干渉をして自然的成長をとめてはならない。この点では、きわめてルソーに近い<sup>25)</sup>。「大多数の子どもの体質は、過度の甘やかしと愛撫のために台なしにされ、あるいは少なくとも損なわれる。」<sup>26)</sup> これは、ロックが健康を維持するための基本的なテーゼであった。だから、子供に厚着させたり、帽子を被らせたりしてはならないし、また、ロックの特色ある訓練方法として有名なやり方は、足を冷水で洗い、いつでも水の出入りするような粗い靴をはかせることであった。外気や水という自然にふれることは、きわめて自然であって、両者の間に断絶をもうけることは非自然的であろう。「身体のこととは、自然がもっともよいと思うように、自然が最善と思うままに委せるがよい。自然というものは、われわれ人間が自然に指図をあたえるよりもずっと美事に、正確にみずからを作りあげるものである。」<sup>27)</sup> ことに、衣服は子どもの体にぴったりと合ったものを着

24) *Ibid.*, p. 75, 邦訳, 94ページ。ついでにいえば、ロックが両親のうちでもことに父親による教育を重視するのにたいし、ルソーが母親による教育を重視するのは、ロックが父親をより理性的であるとの前提に立っているからであろう。

25) J. J. Rousseau, *Émile, ou de l'éducation*, 1762, 今野一雄訳『エミール』上, 岩波文庫版, 42ページ。「自然を觀察するがいい。そして自然がしめしてくれる道を行くがいい。自然はたえず子どもに試練をあたえる。あらゆる試練によって子どもの体質をきたえる。」ルソーの『エミール』はよく、ロックの教育論と対照させられるが、この点ではルソーはきわめてロックから多くのものを学んでいるのであり、一面では共通のものがあつたといえよう。

26) J. Locke, *ibid.*, p. 3, 邦訳, 22ページ。

27) *Ibid.*, p. 12, 邦訳, 30ページ。

せてはならない。もし、そうなら、あるいは体よりも小さい衣服を着せるならば、「血液の正しい循環が妨げられて、身体全体の成長と健康がそこなわれるからである。」<sup>28)</sup> 健康についての自然の尊重は、病気のばあいにも一貫している。「ちょっとしたことに、すぐに薬を飲ませるのはよくないし、すぐに医者を呼ぶことも悪い。とくに、医者が熱心であれば、たちまち戸棚という戸棚に薬ビンをつめ、子どもの胃袋を薬だらけにしてしまう。ふつうの病気のばあいには、盛んに手を出したがる人や、ふだんの食事とはちがった方法で子供の病気を治そうとする人たちに委せるくらいなら、まったく自然のままに放っておくほうが、ずっと安全である。」<sup>29)</sup> 若いころ、医者だったロックのものだけに、この言葉にはきわめて大きい含蓄がこめられているであろう。

このようにみると、ロックの教育論は自然の自由放任論のようにみえる。たしかに、人間は健康について人間の自然的成長をはばんではないのであって、この点ではルソーと共通した考え方に立っていた。だが、ロックの教育論の特色はこの点よりも、むしろ精神の訓練についてである<sup>30)</sup>。もちろん、精神についても「生来の素質 native propensity」が各個人にそなわっているということは、ロックもみとめている。「これらの生得的性向、これらの素質の特徴は、いくつかの格率を定めたり、ただちに干渉してみても改まるものではない。」<sup>31)</sup> のみならず、「神は人間の精神に固有な性格を刻みこんだのであって、人間の顔かたちとおなじく、少しぐらいは改められるかもしれないが、それを全面的に変えたり、反対の傾向に変えたりすることは、まずできない。」<sup>32)</sup> そう

28) *Ibid.*, p. 13. 『エミール』のなかでも、ルソーはつぎのようにいう。「子どもの手足を動けないようにしばりつけておくことは、血液や、体液の循環を悪くし、子どもが強くなり大きくなるのをさまたげ、体質をそこなうだけのことだ。」

29) *Ibid.*, p. 32. ロックは1660年代に医学の研究をおこない、医者としてシャフツベリ卿に仕えるようになったことは、よく知られていることである。なお、医学にかんするこうした考え方は『エミール』にもみられるものである。

30) *Ibid.*, p. 2. ロックは本論の冒頭で教育の中心が精神にあるとして、つぎのようにいう。「精神に関することが本論の主要な部分であって、われわれはこの内的なものに主要な関心を向けねばならない。」また、身体を健康を第一にとりあげながらも、「我慢するということは、身体の健康ばかりではなく、精神のためにも最も価値ある習慣である」とのべ、たえず精神との関係の問題としている。

31) *Ibid.*, p. 141. 邦訳、160ページ。

いは完全に排除されている。「できることなら子供たちは、使用人たちとは、ぜんぜん話をさせない方がよい。なぜなら、礼節ということでも徳性という点でも、これらの悪い慣例がひろまると、子供にもおそろしい勢いでうつるからである。」<sup>24)</sup> こうしたロックの言葉のなかに、われわれはロックの、ひいては17世紀の啓蒙思想の階級的基礎をうかがうことができるし、名誉革命の性格をも知ることができよう。しかも、啓蒙がジェントリ階級から順次、他の階級へおよびと考えられているのである。だが、思想はこうした特殊な階級を基礎としてその普遍的なものがつねに語られているのである。

ロックは人間をほんらい自然的なものであると考え、この「人間の自然」から出発する。ことに健康は身体の自然である。したがって、これに人為的な干渉をして自然的成長をとめてはならない。この点では、きわめてルソーに近い<sup>25)</sup>。「大多数の子どもの体質は、過度の甘やかしと愛撫のために台なしにされ、あるいは少なくとも損なわれる。」<sup>26)</sup> これは、ロックが健康を維持するための基本的なテーゼであった。だから、子供に厚着させたり、帽子を被らせたりしてはならないし、また、ロックの特色ある訓練方法として有名なやり方は、足を冷水で洗い、いつでも水の出入りするような粗い靴をはかせることであった。外気や水という自然にふれることは、きわめて自然であって、両者の間に断絶をもうけることは非自然的であろう。「身体のこととは、自然がもっともよいと思うように、自然が最善と思うままに委せるがよい。自然というものは、われわれ人間が自然に指図をあたえるよりもずっと美事に、正確にみずからを作りあげるものである。」<sup>27)</sup> ことに、衣服は子どもの体にぴったりと合ったものを着

24) *Ibid.*, p. 75, 邦訳, 94ページ。ついでにいえば、ロックが両親のうちでもことに父親による教育を重視するのにたいし、ルソーが母親による教育を重視するのは、ロックが父親をより理性的であるとの前提に立っているからであろう。

25) J. J. Rousseau, *Émile, ou de l'éducation*, 1762. 今野一雄訳『エミール』上, 岩波文庫版, 42ページ。「自然を観察するがよい。そして自然がしめしてくれる道を行くがよい。自然はたえず子どもに試練をあたえる。あらゆる試練によって子どもの体質をきたえる。」ルソーの『エミール』はよく、ロックの教育論と対照させられるが、この点ではルソーはきわめてロックから多くのものを学んでいるのであり、一面では共通のものがあつたといえよう。

26) J. Locke, *ibid.*, p. 3, 邦訳, 22ページ。

27) *Ibid.*, p. 12, 邦訳, 30ページ。

せてはならない。もし、そうなら、あるいは体よりも小さい衣服を着せるならば、「血液の正しい循環が妨げられて、身体全体の成長と健康がそこなわれるからである。」<sup>28)</sup> 健康についての自然の尊重は、病気のばあいにも一貫している。「ちょっとしたことに、すぐに薬を飲ませるのはよくないし、すぐに医者と呼ぶことも悪い。とくに、医者が熱心であれば、たちまち戸棚という戸棚に薬ビンをつめ、子どもの胃袋を薬だらけにしてしまう。ふつうの病気のばあいには、盛んに手を出したがる人や、ふだんの食事とはちがった方法で子供の病気を治そうとする人たちに委せるくらいなら、まったく自然のままに放っておくほうが、ずっと安全である。」<sup>29)</sup> 若いころ、医者だったロックのものだけに、この言葉にはきわめて大きい含蓄がこめられているであろう。

このようにみると、ロックの教育論は自然の自由放任論のようにみえる。たしかに、人間は健康について人間の自然的成長をはばんではないのであって、この点ではルソーと共通した考え方に立っていた。だが、ロックの教育論の特色はこの点よりも、むしろ精神の訓練についてである<sup>30)</sup>。もちろん、精神についても「生来の素質 native propensity」が各個人にそなわっているということは、ロックもみとめている。「これらの生得的性向、これらの素質の特徴は、いくつかの格率を定めたり、ただちに干渉してみても改まるものではない。」<sup>31)</sup> のみならず、「神は人間の精神に固有な性格を刻みこんだのであって、人間の顔かたちとおなじく、少しぐらいは改められるかもしれないが、それを全面的に変えたり、反対の傾向に変えたりすることは、まずできない。」<sup>32)</sup> そう

28) *Ibid.*, p. 13. 『エミール』のなかでも、ルソーはつぎのようにいう。「子どもの手足を動けないようにしばりつけておくことは、血液や、体液の循環を悪くし、子どもが強くなり大きくなるのをさまたげ、体質をそこなうだけのことだ。」

29) *Ibid.*, p. 32. ロックは1660年代に医学の研究をおこない、医者としてシャフツベリー卿に仕えるようになったことは、よく知られていることである。なお、医学にかんするこうした考え方は『エミール』にもみられるものである。

30) *Ibid.*, p. 2. ロックは本論の冒頭で教育の中心が精神にあるとして、つぎのようにいう。「精神に関することが本論の主要な部分であって、われわれはこの内的なものに主要な関心をむけねばならない。」また、身体の健康を第一にとりあげながらも、「我慢するということは、身体の健康ばかりではなく、精神のためにも最も価値ある習慣である。」とのべ、たえず精神との関係を問題としている。

31) *Ibid.*, p. 141, 邦訳, 160ページ。

だとすれば、ロックは宿命論におちいり、『人間悟性論』における生得観念批判とは逆のようにみえるし、教育論そのものも提起できないであろう。だが、ロックはこうした生来の傾向性をみとめながらも、これを理性によって純化しようとする。ここに教育論の課題が生まれるのである。もし、生来の自然と理性との緊張がなければ、人間性の形成の問題は提起できないはずである。「われわれが、日ごろ目にふれるほどの人々については、その十中の八・九までは、その人がなにものであるか、善人か悪人か、有用な人物であるかどうかは、その教育によるのである。」<sup>32)</sup>ことに「子どもの精神はちょうど水のように、たやすくこちらへまたあちらへと向けうるものである。」<sup>33)</sup>

ロックは人間の本性または傾向性を二つの面で考えている。それはいわば善悪の二つの魂である。一方では「われわれが目標とすべきことは、自然があたえてくれているものについて最善をつくすこと、そしてある性質のひとつがもっともおちいりやすい悪や失敗を防ぎ、できるかぎりの便益をはかることである。各人の個々の生来の才能はたしうるかぎり、伸ばさねばならない。それ以上に別のものをつけ加えようとするれば、すべて徒労におわるだろう。」<sup>34)</sup>子どもには、自由でありたいという自然の要求をもち、自発的にものごとをするという傾向をもっているが、これらは大いに尊重すべきである。だが、その反面で、子どもはいろいろの欲望をもつ。ロックはホブズマがいに、つぎのようにいう。「大ぜいいっしょに暮している子供たちは、おうおうにして支配権を、すなわちだれの意志が他のものを支配するかについて争う」<sup>35)</sup>ものであり、また「欲ばり、すなわち、われわれがほんとうに必要な以上物品を私有したり、自分の支配下におきたいという願望は、あらゆる悪事の源である。」<sup>36)</sup>のみならず、子どもには「なにか弱い生物を自分のものにしたばあいに、これを痛めつけた

32) *Ibid.*, p. 66, 邦訳, 85ページ。この点について, S. P. Lamprocht, *The Moral and Political Philosophy of John Locke*, 1962, p. 116 を参照。

33) *Ibid.*, p. 2, 邦訳, 19ページ。

34) *Ibid.*, p. 2, 邦訳, 20ページ。

35) *Ibid.*, p. 67, 邦訳, 86ページ。

36) *Ibid.*, p. 151, 邦訳, 170ページ。

37) *Ibid.*, p. 152, 邦訳, 171ページ。

がる。たとえば、雛鳥とか蝶とか、あるいはこうした弱い動物を手にとると、おうおうにしてひどくいじめたり、はなはだ乱暴にこれを取りあつかう。』<sup>38)</sup>とここで、これらの「人間の最初の諸行為は、理性や反省よりは、むしろ自愛にみちびかれるのであるから、子供たちが成長した理性や深刻な省察の産物たる善悪の正しい基準から脱却しがちであるのも、なんらおどろくにはあたらない。』<sup>39)</sup> こうした人間の自然にひそむ悪魔的なものをみとめることは、シャフツベリの人間像とはあきらかにちがっているといえよう。

だが問題は、ロックがホップズとちがって、人間の内面性にこうした自然的衝動力を抑制する力としての理性をみとめ、これを開発することによって、人格の内部で調和させるという点であろう。ロックの教育論の骨子はまさに、ここにあった。「それぞれの年齢におうじた理解力や好みに適応した欲望をもつこと、それ自体は悪ではない。この欲望を理性の支配と抑制の対象にしないことが、悪である。問題は、欲望をもつかもたないかにあるのではなくて、それらについて、自らを統制し否定する力があるかないかである。』<sup>40)</sup> だからこそ、「子どもの精神がもっとも柔軟で矯めるのにもっとも容易な最初の時期に規律に従い、道理に服するように教育され」<sup>41)</sup> ねばならないのである。神は人間を理性的動物としてつくったとはいえ、これは自然にあたえられているものではない。むしろ、理性的存在という点では、子どもは成人より劣るものと考えられている<sup>42)</sup>。したがって、理性ある両親や育ちのよい家庭教師が子どもにこれを注入しなければならない。だが、ロックが子どもには理性をまったくみとめていないわけではない。それはいわば潜在的にあるものであり、「天性の原理」である。ロックは親が子供を感情的に叱ることをたしなめてつぎのようにいう。「子どもたちは、小さいうちから、感情と理性とを識別することを知っている。

38) *Ibid.*, p. 172, 邦訳, 192ページ。

39) *Ibid.*, p. 153, 邦訳, 172ページ。

40) *Ibid.*, p. 37, 邦訳, 55ページ。

41) *Ibid.*, p. 34, 邦訳, 52ページ。

42) *Ibid.*, p. 62, 邦訳, 62ページ。「子どもには判断力が欠けているからこそ拘禁やしつけの必要が生ずるのである。」

それで、理性に由来することがらについては、尊敬の念をいだかざるをえないが、同時に感情的なものにはたちまち軽蔑を感じるようになる。』<sup>43)</sup> 教育するのも、まず教育されねばならない。そのためには、なによりもまず、感情を抑制しなければならないのである。

### Ⅲ 同意と調和

子どもの自然には善性も悪性もある。ロックは「この子どもの天真爛漫な性質を維持し、その善性を大切に助成してやる、とともに他面でおだやかに、子どもの悪い傾向性を修正または除去する」<sup>44)</sup> ことを、教育論の課題とした。このばあい重要なことは、人間の自然的諸傾向がいかなるものであれ、これを理性の力で抑制し、比較検討することによって、理性の支配下におくことである。われわれはこの欲望または自然的諸傾向を理性で純化することに、『人間悟性論』から一貫したロックの基本的な考え方をみとめることができよう<sup>45)</sup>。この点は『教育にかんする省察』のなかでも、くりかえし強調される点である。精神のたくましさは、「自分自身の傾向性に抗して、自分の願望を否定することであり、自分の欲望がある方向にむかっているにもかかわらず、理性が最善のものとして指示するところに従うことができる」<sup>46)</sup> という点にある。ロックがこのような理性的存在として人間をつかんだのは、すでにのべたようにピューリタン革命における革命諸派の自然的衝動性を否定することによって、名誉革命段階におけるブルジョワジーのエートスを確立しようとしたことにほかならない。だから、ロックのもっとも嫌悪した人間類型は、理性の冷静な判断力を用いずに、感性や欲求のままにふるまう人間であり、ロックはこれを原始的な粗野 *natural roughness* と断じたのである<sup>47)</sup>。

43) *Ibid.*, p. 95, 邦訳, 114ページ。

44) *Ibid.*, p. 222, 邦訳, 245ページ。

45) 小著『ロックにおける人間と社会』第2章第5節を参照。

46) J. Locke, *ibid.*, p. 34, 邦訳, 52ページ。

47) *Ibid.*, p. 208-9, 邦訳, 232ページ。ロックは徳性を「礼儀の正しさ」にあるとし、衝動的な非礼を激しく攻撃している。非礼の「第一のものは、自然的な粗暴さである。これは人を他人に対して反感ではなくしてしまふ。そのために彼は他の人々の傾向や気質や身分にたいし、なんら

このように「理性の是認しないばあいには、われわれの欲望の充足を自ら否定する力」<sup>48)</sup>こそが、なによりも人間の徳性であって、教育のもっとも重大な目標である。ところで問題は、ロックが理性による欲望の制御をどのようにおこなうのか、またどのような徳性をもつ人間像を理想としていたかということである。ことに後者の問題は、『人間悟性論』ではあきらかにされなかったことであり、『教育にかんする省察』のなかでのみ、うかがうことができるであろう。ロックがこのように理性の優位を主張したことは、人間は生まれながらにして一定の人間関係を取り結ぶものである、という考え方と深く結びついていたのである<sup>49)</sup>。この点は、人間の自然を感覚的主体として相互に敵対しあうものと考えたホブズとは根本的に異なるロック思想の社会性を端的にしめしている。ロックの思想には、こうした社会性がきわめて特色的にあらわれる。ロックは教育論の有名な章である「褒美について」のなかで、子どもは生まれながらにして自己の行為が、他者によってどう受けとられるかにきわめて鋭い感受性をもつものであるとして、つぎのようにいう。「子どもというものは、ほめられること賞讃をうることに、きわめて敏感である。」<sup>50)</sup>だから、「よい行いをして賞讃され尊重される人々は、かならずあらゆる人々に愛され可愛がられて、そのうえ、その結果として他のあらゆる好ましい多くのことがらが得られるし、一方よくない行いによって非難をうけ、あるいは名誉を維持する努力を怠るものはだれでも、かならず人々の軽蔑をかい、辱しめをうけることはさげられず、そのうえ満足と喜びを受けるようなものは、なにより一つ得られなくなってしまうということ、このことをはっきり認めるように教育する」ならば、「徳性を養うに役立つであろう。」<sup>51)</sup>

スミスは『道徳情操論』のなかで、「自然が人間を社会に適するように作る

の敬意をも払わない。……だれでも、見れば嫌になり、だれ一人それによってなぐさめられない徳性 brutality である。」

48) *Ibid.*, p. 42, 邦訳, 59ページ。

49) わたしはすでに、ロックの『統治論』のなかに、自然状態で一定の理性的な人間関係を前提していたことを、ホブズとの対比であきらかにした。小著第4章第3節を参照。

50) *Ibid.*, p. 57, 邦訳, 75ページ。

51) *Ibid.*, p. 57-8, 邦訳, 76ページ。



とき、自然は人間に自分の仲間のもを喜ばせたいという本源的な欲求とともに、自分の仲間のもを怒らせることを嫌う本源的な反感をあたえたのである<sup>52)</sup>と、のべている。このばあい、スミスはロックとはちがって、子どもではなくて成人についてのべているし、また教育によらなくてもこの本性は開示されるものと考えているのだけれども、こうした人間性の側面をむしろロックが強調している点では、きわめてスミスのそれに近いといわねばならない。もちろん、ロックには前節であきらかにしたように、人間性のうちの悪魔的な性格を経験的にみとめるけれども。総じていえば、このようにホッブズの性格とスミスの性格との二つの側面をロックはもっていたのであるが、根柢にはやはり人間性の善性や社会性があつたと、わたしは考えている。とともに、この意味でもロックの道德哲学は17世紀から18世紀への啓蒙思想の過渡期を映し込んでいるのである。

すでに、名譽革命の時代にはブルジョワジーの個人的人格が私有財産権の確立をとおして一つの普遍的な結びつきをしめしていた。すなわち、個人は自己の主観的判断によって行為するのであるが、それは同時に他者の承認をえる客観性をもたねばならない。わたしはこうしたブルジョワ的人間の形成をロックの「同意」というカテゴリーに求めたい。ロックは教育論のなかでつづいていう。「良い評判をうること」は、「有徳のまたは充分正しい行動にたいして、あたかも普遍的な承認 common consent によるかのようにして、他人の理性があたえる確証 testimony と賛同 applause である」<sup>53)</sup>と。のみならず、ロックはさらに「いつもひとに好感をあたえる優雅 gracefulness」という徳性を強調し、これはほかならぬ「ある人の行為と、そのばあいにあたって適切と認めざるをえないような精神の傾向と、これら二つのものの自然な一致ということに由来する」<sup>54)</sup>とも、のべている。われわれは、こうしたロックの考え方のなかに、スミスが「道德的適正さ」を判断する基準とした他人への「同感」や、

52) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, p. 133, 米林富男訳, 上巻, 253ページ。

53) J. Locke, *ibid.*, p. 61, 邦訳, 79ページ。

54) *Ibid.*, p. 68, 邦訳, 87ページ。

「感情移入」とおなじような言葉のひびきを聞きとれるであろう。

それでは、ロックは他者の同意をえられる徳性をどのようにみているであろうか。そこには、きわめてシャフツベリの人間像に似た側面がうかがえるのである。「われわれは、慈悲深い human, 友情のある friendly, 礼儀正しい civil 気質に接するたびごとに、感銘をうけずにはいられない。自由で、自らその働きにおいても自主的であり、下品、狭量、傲慢、無礼などではなく、他に大きい欠陥がないならば、こうした精神はあらゆる人々をひきつけるであろう。そしてこの立派な精神から生まれた行動もまた、その精神の真のしるしとして、われわれを喜ばせる。しかも、これはいわば精神と内的傾向の自然の放射線 natural emanations from the spirit and disposition within であるから、なんらのわざとらしさも感じないのである。」<sup>55)</sup>そこには、シャフツベリが人間の自然感情として礼賛した愛他感情が流れているはずである。もとより、シャフツベリとはちがって、ロックはことに教育の面では適法性と正義とを強調し、子どもが親にたいしてたえず畏敬の念を生ぜしめる必要のあることをしめしている。そこに強制もあり規律や処罰が必要とされる。だが、その反面で、たえず「子どもを親たちの仲間の一員として迎え、寛容と思いやりと、ことになんでも上手にしたときには、いつも愛撫を欠かしてはならない。」<sup>56)</sup>つまり、教育は愛情が根本になければならない、というのである。というよりは、シャフツベリとおなじように、ロックの目指す社会的徳性は、ロックに特有な「自発性 voluntariness」の尊重と「規律 disciplin」とを調和させることによって、いいかえれば教育の仕方として「推進力 encouragement」と「抑制力 discouragement」とをバランスさせることによって達成されるのである<sup>57)</sup>。しかも、このような調和の境地は「美」である<sup>58)</sup>。「秩序ある教育」によってのみ、「身のこなしというものは、熟練した音楽家の指先のように、なんら氣に

55) *Ibid.*, p. 68, 邦訳, 87ページ。

56) *Ibid.*, p. 99, 邦訳, 157ページ。

57) *Ibid.*, p. 92, 邦訳, 112ページ。

58) *Ibid.*, p. 68, 邦訳, 87ページ。66節の規律に関するロックの叙述は、きわめてモラル・センス・スクールの思想に近く、ロックの道徳哲学をとらえるうえで、きわめて重要な節である。

したり考えるところもなしに、自然に調和ある秩序 harmonious order に達するのである。』<sup>59)</sup> 調和は教育の仕方そのものだけにあるのではない。ロックの追求する理想の世界がそれであり、「慎重 observation や勤勉 industry と結びついた正義 justice と寛容 generosity と中庸 sobriety の原理」<sup>60)</sup>こそが、それであった。

#### IV 社会的自然と秩序

われわれはこれまで、ロックの教育論のなかで、当時のブルジョワ社会の形成をになっている人間の内面性の葛藤をとおして、どのような人間像を確立しようとしていたか、をとらえてきた。ロックはこの葛藤のなかで自然的衝動や欲求を理性によって抑制し、これを鎮静しようとする点では、あきらかにホップズの人間像とは異った類型を作り出したのである。それとともに人間の内面性のなかに理性的教育による人格の自律性の確立の可能性をもみているのであって、もはや超越的な神の啓示の助けをかりずとも、社会に生きる近代的個人の力の躍動をよみとれるはずである。すでに、18世紀の道德感情の成立は目の前にあった。シャフツベリのもっとも有名な論文「徳または価値に関する研究」が書かれたのは、ロックの『教育にかんする省察』の5年後、すなわち1698年のことであった<sup>61)</sup>。

ところで、ロックの道德哲学はその一面においてきわめて理想主義的性格をもっており、人間の自然を理性によって純化し、これまでのべてきたようないろいろの社会的徳性 social virtue を完成させることを教育論の課題とした。人間性には経験的に欲望の衝動性と理性があるのだけれども、教育によって人格の完成へとむかうことができるという啓蒙思想特有のオプティミズムが、同時にロックの前提となっていはいしまいか。そしてルソーとは異って、理性なき人間の自然は粗野であり、これは純化され訓練されるべきものでもあった。ロ

59) *Ibid.*, p. 118. 邦訳, 138ページ。

60) *Ibid.*, p. 82. 邦訳, 101ページ。

61) 小著『ロックにおける人間と社会』第5章、シャフツベリの道德哲学、を参照。

ックがもっとも嫌悪したものは、加工されない生の自然の粗暴であり、欲望である。この自然は人間関係のなかで、理性によって否定されねばならない。こうしてはじめて、社会的徳性は達成されるのであり、生の人間の自然がいわば「社会的自然」へ昇華されるものであった。すなわち、ここでは人間の自然そのものが、そのまま社会秩序を映し出しているといえよう。ロックが社会的徳性としてしめす基本的なものは、自己抑制して他者への愛情に喜びを感じる人間である。しかも、ロックはこの道徳哲学を教育論によって支えている。というも、原始的自然から社会的自然へと人間性を転化させることが教育論の課題であったばかりではなく、社会的徳性を自然たらしめるのも教育の役割であった。ロックは粗野に対して優雅をきわめて高く評価する、だが、その優雅さはけっして「気取り affectation」であってはならない。「技巧に走ったための下品さや、わざわざ苦心した末に悪い型にはまったりするくらいなら、生のままの単純な粗野な性格のほうが、はるかによい。」<sup>62)</sup> 社会的徳性は、どこまでも自然なのであって、それはたえざる訓練と規律によってのみ生まれるであろう。ロックが高く評価するのは、こうした自然となった社会的徳性なのである。逆にいえば、社会的徳性が自然化されるのであり、両者が一つになることが、ロックの課題である。「ある人々の行動のなかにみられる美 beauty は、かれらのすべての行為に輝きをあたえ、かれらに接するすべての人々をひきつける。それというも、たえず実行してその身のこなしが作法にかなえば、また、こまかい親切な表現などが、生まれつきまたは習慣で身につけてしまえば、こんなことはその人にとって楽なこととなるから、けっしてわざとらしいとか、苦心の末だとかとは思われず、かえって優しい精神やよい教育をうけた性向の自然の流露だと思われるからである。」<sup>63)</sup>

ところで、ロックがこのように人間の本性の自然な発露として、「他人を愛し、他人に好意 good nature をしめす……立派な人物の真の基礎をきずく」<sup>64)</sup>

62) J. Locke, *ibid.*, p. 70, 邦訳, 89ページ。

63) *Ibid.*, p. 68, 邦訳, 87ページ。

64) *Ibid.*, p. 203, 邦訳, 226ページ。

ということは、同時に「徳性の根柢」に神への確固たる信仰があるからである。ロックは『人間悟性論』で理性と啓示との一致を主張したが、教育論のなかではいよいよこのことがあきらかとなる。「徳性の根柢として、ひじょうに早くから、子どもの心に真の神の観念、なにものにも依存しない最高存在として、われわれがあらゆる善をそこから受け、われわれを愛し、われわれにあらゆるものをあたえたまう万物の創造主であり製作者であるところの神の観念を刻印すべきである。」<sup>65)</sup>ここに、ロックの社会的徳性をもつ人間像は、宗教と離れがたく結びついていることが、あきらかであろう。

ところで、ロックが理性的教育によって社会的徳性を養おうとしたことは、個人の人格内部における調和ある秩序をうちたて、そのことによって新しい社会秩序を支える人間を生みだそうとした、にほかならない。ロックは他人を軽蔑したり、社会秩序に反する生来の粗暴さや無礼を極度に排斥する。「一人だれかが立腹すると、その座は全体を乱してしまうし、こんな衝突が少しでもあると、調和がくずれ去ってしまう。」<sup>66)</sup>この言葉のなかに、ロックがいかに全体の調和ある秩序を重視し、そのために「自己感情の抑制」を要求しているかが、あきらかとなるだろう。このような類型の人間像は当然に、冒険をも極度に排斥する。「冒険 hazard がどんなものであろうとも、それがいかなる用をなすか、あるいは結末はどうなるかということを考慮もせず、その危険の正当な評価もせず、軽率にその渦中にとび込んで、直面すべき禍害について知るところがないならば、理性ある被造物 rational creature のなすべき決断ではなく、獣的な狂気 brutish fury というべきである。」<sup>67)</sup>

たしかに、ロックが感性的衝動を理性によって純化することは、17世紀末の歴史の要請に答えたものであり、ホッブズ的人間に対して新しい社会秩序を担う人間の在り方を打ち出したといえるし、これが18世紀の啓蒙思想にあたえ

65) *Ibid.*, p. 198, 邦訳, 222ページ。ロックにおいて宗教と教育とがいかに結びついているかについては、岩田朝一『ロック教育思想の研究』第4章を参照。

66) *Ibid.*, p. 212, 邦訳, 232ページ。

67) *Ibid.*, p. 161, 邦訳, 181ページ。

た意味は没することはできないであろう。また、体制変革の問題は同時に内なる人間性の変革つまり教育の問題をも提起していることを忘れてはならない。だが、すでに指摘したように、ロックの教育論は先ずジェントリ階級の秩序を確立することによって、これを他の階級へと拡大するという啓蒙思想の性格をもつものでもあった。のみならず、われわれはロックの理性による社会的自然または徳性の確立が、しだいにブルジョワ社会秩序へ経験的に定着していくときに、これを内部から打ち破る力は、かえってロックが抑制しようとした感性的衝動力にあることをも忘れてはなるまい。ロックが理性による感性の純化というとき、純化されずにそこから落ちこぼれるものはないであろうか。原生的自然を社会的自然に転化するときに、かえって本来の自然を歪めることにならないであろうか。歴史の変革はおうおうにして、理性では純化されない感性の衝動力に担われるのである。ルソーの提起した問題を、わたしはこのようにうけとめている。ロックとルソーの提起した問題は歴史をこえて、現代にも生きているのである。